

## ICF（国際生活機能分類）の学校現場への適用

- 小・中学校等での活用の可能性を探る -

- 中学校教諭の立場から -

### 1. はじめに

通常学級に在籍する難聴生には、従来、聴能訓練・発音指導・言語指導・教科の補充等、の指導を行ってきた。しかし近年は、本人への直接的な指導のみならず、学習面や人間関係面での環境を整備することの重要性が認識され始めている。たとえば、周囲の生徒に聴覚障害についての理解が深まることにより、学校環境での本人のQOLが向上し、それにより能力が伸長されるというようなことである。しかし、卒業後の進学や就職等の社会参加が視野に入り始めるこの時期には、教員が環境を整備するだけでなく、障害のある本人が環境を整備する力、環境調整能力を身につける必要があると考える。

そしてそのためには、指導する教員が、障害の特性に合わせた環境整備の手段を知り、その効果を検証しておく必要がある。

そこで本研究では、難聴生を取り巻く環境整備の具体例をあげ、環境整備により難聴生の活動や参加の状況が向上することを、ICFのコードと評価点を活用し検証した。結果的には、環境を整備するというエコロジカルな支援の評価として、ICFを活用することが効果的であることが示唆された。

なお、活動と参加の評価点については、厚生労働省大臣官房統計情報部作成の「ICF活動と参加の評価点基準（暫定案）平成19年3月版」を活用した。環境因子の評価については、発表者の主観による。

### 2. 対象生徒

中学1年生、女子、聴覚障害あり（聴力レベル、右：130dB、左：110dB）

### 3. 環境調整の事例と評価

#### (1) 一斉授業

\* 本生徒は高度難聴であるため、一斉授業では教員の話し言葉が聞き取れない。そのため、板書を頼りに教員の口形を読み取って授業内容の理解に努めていた。また、教員の冗談にクラス中が笑いに包まれても、笑いの意味が自分だけ理解できず、疎外感・孤独感を感じていた。そこで、パソコンによる要約筆記の支援を実施した。その結果、授業の内容がわかるようになり、学習意欲が向上した。また、級友の発言がわかるようになった。

#### 【環境整備による変化】

	環境整備前の評価	環境整備	環境整備後の評価
活動・参加	【話し言葉の理解】 p 3 1 0 . 3 3 0	パソコン	【話し言葉の理解】 p 3 1 0 . 0 3 0
環境因子	【コミュニケーション用の生産品】 ・補聴器 e 1 2 5 1 + 1 ・板書 e 1 3 0 0 + 2	要約筆記	【コミュニケーション用の生産品】 ・補聴器 e 1 2 5 1 + 1 ・板書 e 1 3 0 0 + 2 ・特殊なソフト e 1 2 5 1 + 3

			<b>【権限を持つ立場にある人々の態度】</b> e 4 3 0 + 4 <b>【知人等コミュニケーションの成員の態度】</b> e 4 2 5 + 2
--	--	--	---

備考：

【話し言葉の理解】 p 3 1 0 . 0 3 0

獲得した情報量が増加した。

【権限を持つ立場にある人々の態度】 e 4 3 0 + 4

教員が、本生徒に要約筆記や個別の指示・支援を行った。

【知人・仲間・同僚・隣人・コミュニケーションの成員の態度】 e 4 2 5 + 2

周囲の生徒たちが、本生徒のための要約筆記に理解や興味をしめし、配線や席の調整に協力したり、パソコンに入力して本生徒と交流したりする様子が出現した。

## (2) 友人の態度

\* 中学入学と同時に転居してきたため、周囲に友人が皆無だった。また、級友らは、小学校時代に難聴生が身近に存在しなかったために、難聴生との交流は未経験であり、聴覚障害についての知識もなかった。そのため、級友らはコミュニケーションの取り方がわからず、お互いに意思疎通が図れず、本生徒は孤立していた。そこで、本生徒の聞こえの程度や聞こえ方を理解し、適切なコミュニケーション方法を知るための、「聴覚障害を理解する授業」を実施した。その結果、級友らの理解が深まり気持ちの溝が埋められると共に、適切なコミュニケーション手段を知り、良好な関係が築かれる基礎ができあがった。

### 【環境整備による変化】

	環境整備前の評価	環境整備	環境整備後の評価
活動・参加	<b>【対人関係の形成】</b> p 7 2 0 0 . 4 3 1	障害を理解する  授業	<b>【対人関係の形成】</b> p 7 2 0 0 . 1 3 1
環境因子	<b>【友人の態度】</b> e 4 2 0 . 3		<b>【友人の態度】</b> e 4 2 0 + 2

備考

【対人関係の形成】 p 7 2 0 0 . 1 3 1

授業後、理解が深まり、適切なコミュニケーション方法で話しをしたり、配慮したりする様子が始まった。

【友人の態度】 e 4 2 0 + 2

本生徒と交流する人数が増え、質が深まった。

## (3) コミュニケーション手段

\* 級友らは、適切なコミュニケーション手段（会話の際は、口をゆっくりはっきり開けて顔を向けて話す）を知ったが、スムーズなコミュニケーションが成立しているとは言い難い。そこで学年の生徒全員に指文字を一ヶ月指導するとともに、手話部の活動を活発化させた。その結果、簡単な手話や指文字で会話できる生徒ができ、コミュニケーション

の改善や良好な人間関係の構築に役立った。

**【環境整備による変化】**

	環境整備前の評価	環境整備	環境整備後の評価
活動・参加	【会話の持続】 p 3 5 0 1 . 2 2 0	指文字指導 手話部指導	【会話の持続】 p 3 5 0 1 . 1 2 0 【対人関係の形成】 p 7 2 0 0 . 1 4 0
環境因子	【友人の態度】 e 4 2 0 + 2		【友人の態度】 e 4 2 0 + 3

\*備考

【会話の持続】 p 3 5 0 1 . 1 2 0

相手の話が良くわかる、冗談が通じるなど、コミュニケーションがスムーズになった。

【対人関係の形成】 a 7 2 0 0 . 1 4 0

指文字や手話で会話をしている様子を見ていた他の生徒が興味を示し、会話に加わるようになった。

【友人の態度】 e 4 2 0 + 3

スムーズなコミュニケーションが可能となり、好意的な態度となった。

**(4) 生徒による要約筆記**

\*朝や帰りの学活等では、教員が要約筆記をせず、級友らにやってもった。教員ではなく級友が要約することで交流が深まる、また内容が比較的平易なため中学1年生でも要約筆記が可能であると考えたからである。これにより、さらに交流が深まると共に、クラス全体の理解も深まった。

**【環境整備による変化】**

	環境整備前の評価	環境整備	環境整備後の評価
活動・参加	【話し言葉の理解】 p 3 1 0 . 3 3 0	生徒による 要約筆記	【話し言葉の理解】 p 3 1 0 . 0 3 0
環境因子	【コミュニケーション用の生産品】 ・補聴器 e 1 2 5 1 + 1 ・板書 e 1 3 0 0 + 2 【友人の態度】 e 4 2 0 + 1		【コミュニケーション用の生産品】 ・補聴器 e 1 2 5 1 + 1 ・板書 e 1 3 0 0 + 2 【友人の態度】 e 4 2 0 + 2

\*備考

【話し言葉の理解】 p 3 1 0 . 0 3 0

生徒の要約筆記により、獲得した情報量が増加した。

【友人の態度】 e 4 2 0 + 3

級友らは、難聴生にとっての要約筆記という手段の有効性を知り、協力的になった。また用紙にいたずら書きなどをして交流が深まった。

**4. 他障害について**

さてここで、聴覚障害以外の障害について、発表者の経験知の範囲で考える。ADHDの生徒の例を取り上げれば、教室内の刺激の減少・クールダウン部屋の確保・明確で簡潔な指示等の環境整備が必要であろう。それらの支援を実施した後、支援の効果を評価する。すなわちエコロジカルな支援を実施し、ICFで評価する。評価の結果、効果のあがった支援については、本人とその効果を確認し、このような支援や配慮が自分には必要だと認識を持ち、自分から求められるような姿勢を育成する指導が、中学校の段階では必要と考える。

## 5. ICF活用の効果と課題

### (1) 効果

今回の研究では、ICFの活用に次のような効果が感じられ、期待できた。実施した環境整備が「良かった」かどうかを、数値で検証できる。「良かった。」という主観だけでなく、「良かった」量を数値で示すことで効果の度合いが明確になる。支援の効果が数値で示されるので、個別指導計画の評価への活用が期待できる。教育支援計画策定の際、医療や福祉の現場との共通言語としての活用が期待できる。

### (2) 課題

中学校の現場でICFの活用を考えた場合、次のような課題がある。

#### 複雑さ

項目が多くチェックに膨大な時間を要することが見越され、活用に現実味が感じられない。障害種別のコードのセットや電算化などの工夫により、発表者の主観では20分以内でチェックできることが望ましいと感じる。

#### 評価のあいまいさ

ICFの評価基準があいまいで、評価の信憑性に不安がある。今回は活動・参加の評価には前述の評価基準を活用したが、聴覚障害の場合には適当ではないと感じられる部分があった。

#### 教員へのICFの浸透性

特に通常学級の教員にはICFは全く浸透していないのが現状である。初任者研修等での位置づけが必要。